



講演会の様子1

非常に混ぜこぜですよ。今日は「一応、私、着物で来ておりますが、今日お着物の方、会場には他にいらつしやらないですよ。でも、例えば、江津湖で花火大会がある時とか、ちよつと浴衣着ていたら楽しいだろうなっていう気持ちになるし、藤崎宮の秋の大祭の時には、行列に参加の皆さん、法被着られて、伝統的な衣装で過ごされるじゃないですか。服装に関してもそうなんですけど、例えば1日の中の食事でも。朝はパンとコーヒー、昼はパスタとか食べて、夜は「やっぱ日本人は白いご飯と味噌汁だよ」なんて言いながらのご飯とか。なんか日本人の生活っていうのはすごく混ぜこぜになってるんですね。だけれども、それが1番自分たちにとって快適だなという風に感じ、それを素直に絵にしてい

けばいいんじゃないかなという思いで「ニッポン画」を描いています。この作品は、2001年に描いた「松樹鉄鶴図」という作品です。松と太陽が描いてあります。左上には、本当だったら鶴が飛んでいないといけないところなんですけど、鶴のロゴマークの飛行機を飛ばせまして。手前には信号機があって、端には、本当は大きな石とかを描いたらバチつとはまるんだろなところ。ここにゴミ箱を描きました。ちなみに、この松と信号のシリーズはたくさん描いていて、皆さん「なんで信号と松なんですか」って尋ねられる方が多いんですけども、若い人には全然受けないダジャレになるんで恥ずかしいですけど、気づいていただけたでしょうか。「信号を待つ」と、そう、笑いよりもあーあ

なるほどーと納得感みたいな。そういうことでございますね。

今まで見ていただいた初期の「ニッポン画」では、日々の暮らしをベースにして作品を作っていたんですけども、徐々に伝統的な物語を自分の作品の中に入れ込めなかなと考えるようになりました。私は大学時代に能楽の部活に入っていました。京都には、部活動やサークルとして能楽部がある大学がいくつかあります。京都大学とか同志社大学とかは、プロの能楽師も輩出しているぐらいです。私も能楽部でしたので次第に能楽の物語を踏まえた作品を制作するようになりました。そのあたりの作品をご紹介しますと思います。

これは「白梅占字ブロック図屏風」というタイトルで、VOC A賞を受賞した

作品です。能に「弱法師（よろぼし）」というお話があるんですけども、その物語をベースにして描いたものです。向かって左側に、ちよつと人の手と足袋を履いている人の足が見えていると思うんですけども、これがヨロボシさんというかヨロボシ君です。ヨロボシ君は高安の何がしという高貴な家の生まれなんですけれども、昔話ではよくありがちな、お父さんに対して継母がヨロボシ君は悪いことを考えてると讒言（ざんげん）します。嘘の情報を信じたお父さんはヨロボシ君を勘当し、家から追い出してしまいます。追い出されてボロボロの生活をするようになったヨロボシ君、目が見えなくなつてその辺を徘徊しています。なぜ法師の姿をしているかと言いますと、当時は、お坊さんであれば

税金がかからなかったからです。ちよつど春のお彼岸の時期でして、この物語の中ではこの梅の花が非常に象徴的な役割を果たします。右上の方から、ちよつと琳派的な、梅の花が下りてきているというような構図の作品です。

これからは熊本で取り組んだプロジェクトの話です。

熊本では2016年に大きな地震がありましたね。その時、城下町の鍛冶屋町に長年開業してきた森本襖表具材料店も大変大きな被害を受けました。このお店は熊本で唯一というか1番古い表具店で、屏風とか掛け軸の材料を扱う店でした。震災後間もなく、中学校と高校の1つ上の先輩で、熊本で建築士をやっている人から森本さんを紹介していただき、お店にお邪魔

をしました。建物自体が傷んでしまっているの一旦廃業するという話でした。今は少しずつお仕事をまた始められてるようなことを伺っていて、すごく良かったなと思っています。しかし、当時は非常に落胆されていて、建物を壊すのと同時に、家にあるものも全部一緒に処分してしまおうという話になっておりました。屏風も傷んでいるものもあって廃棄してしまうという話だったので、それらをいただき、その屏風を使って何か制作出来ないかと思いました。でも、こういう経緯の屏風です。自分の表現をするのは何か違う、何か熊本の人々が大事にしてきたもの、それにはその人にだけしかない物語が潜んでいるのではないだろうか、人々の思い出物語を描くことにしました。

例えば、こんな作品です。これは私の何十年か前の作で、描かれているパソコン、めっちゃ古いですね。マックユーザの人、これ見たら、うわ、懐かしい、とか言うでしょう。左側に書かれているのは、CDラジカセです。最近全然見ないですね。これは、このように、物がたくさん描かれています。森本さんからいただいた屏風には、中にこういう風にいるんな人の思い出のものを入れ込んだ作品を描きたいなと考えました。そこで、皆さんに描いてほしい思い出のものを募集しました。今日来てくださった方々にもご協力いただき、21名の方から応募があった24のアイテムを組み合わせて、このように6点の作品を完成させました。これらは島田美術館で発表し、この作品を収蔵していただきま



講演会の様子2

した。また、こちらの作品は、熊本市現代美術館の収蔵になりました。このような形で、プロジェクトだけではなく、展覧会も開催出来て非常に良かったと思っています。

次は、「たろうつなぎプロジェクト」の話です。津奈木町のつなぎ美術館の企画で住民参画型プロジェクトに取り組みました。

津奈木町は、実はかなり歴史的に古い地域なんです。そんなにあくさん昔話みたいなものは伝わってないなというところで、最初から、新しい昔話を創出するという形でプロジェクトを始めました。

リサーチは色々やっただんですが、一番重きを置いたのは、高齢者施設でのインタビューです。80代、90代の22名の方に集まっていただき、

3、4人1組でお話を伺いました。職員の方からは、おじいちゃん、おばあちゃんなので、話を聞くのは1時間ぐらいで、それ以上は疲れますからねと僕に説明があったんですけども、もうとんでもない。何時間でも喋ります。たくさんお話をしていただきました。そのお話、どれもこれもほんとに面白いこと。僕らが例えば同じぐらいの年になった時に、こんなに濃い話ができるかなっていうぐらいでした。そういう時代でしたよね、きつとね。もう苦労話も多いですし、戦争もありますし、水俣病もありますし、もうすごく濃密な時代を生きてもうのが非常によくわかりました。

お話を伺った後、その高齢者の方々のお話や津奈木町や地域に伝わっている昔話をまぜ

こぜにして、私は5つ新しい昔話を作り、熊本の実家で5枚の絵にしました。^{※2}

その作品を紹介しましたね。この絵は、「笛吹き男と130人の子供たち」です。こちらは、「黄金姫」という作品です。地元のおばあちゃんの話を中心に作りました。ご主人じゃなくて奥様自身が柑橘類の出荷の仕事を始めたら、あれやあれやという間に事業が大きくなって鹿児島や大阪、京都まで果物を出荷するようになったという話です。ここでは、私は、兄弟で力を合わせて不思議な木の実を育てるという物語にしました。これは、「孝女チヨ」です。孝行娘のチヨさんが良い行いをしたことと幸せになるというお話です。こちらは「メジロ太郎」。全く何もできない、良いところがないけど運だけが良いというメジロ

太郎。メジロが捕れないメジロ太郎なんです。メジロ捕りが子どもたちの遊びの中心だったらしいんですけども、これも、面白い話です。90歳ぐらいのおじいちゃん、多分80年前ぐらいの話じゃないですか。昨日のここのように、お、わ、わしはメジロがいっちゃん捕れなかったもんね、1匹も捕れたことがなかったと話されるおじいちゃんが面白く、このおじいちゃんを主人公に描いたのが「メジロ太郎」ですね。最後が「伍大夫どん」(ごだゆうどん)の話です。この人、よく鬼さん、鬼さんって言われるんですけども、実は相撲取さんです。津奈木町出身で、実際に荒瀧伍大夫さんという相撲取りがいっちゃったそう、その方が昔話になっているんです。話がいくつもあって、それがみんな短い話

ばかりなんです。その中の1つに、伍大夫どんのお母さんが、外で五右衛門風呂に入っていると、雨が降ってきた。濡れるのが嫌だから、力持ちの伍大夫どんが、その五右衛門風呂ごと抱えて屋根のあるところに持って行ったところ、という話です。なるほど、僕が作った昔話は次のようになります。津奈木町に戦が起って大変なことになりました。伍大夫どんは力持ちなんです。戦うことはしたくない。でも、みんなの何か役に立ちたいということで、子供たちを町から逃がそうとします。それで、130人の子供たちをバスに乗せて走り出します。しかしバスはパンクしてしまいます。すると伍大夫どんはその怪力を振り絞ってバスを引っ張って走り出します。それでなんとか子供

たちを逃がしてめでたしめでたしという話なんです。これ、前半の話の流れでなんとなく皆さんわかっていただけたでしょうか？ ダジャレになってるんです。お母さんが雨に濡れるのが嫌で、風呂ごと抱えて持って行った。僕の方は、バス(お風呂)ごと引っ張って逃げたという物語になっております。はい、なんとかオチがついたよう。

私自身は、絵を描くだけではなくて、日本の伝統であるとか地域文化をこのように活かしながら作品を作っていくことを今考えながら制作をしています。この熊本にもたくさん地域文化があると思います。日本各地には本

様に、様々な地域文化がありまして、そういったものを活かしながらこのように作品として表現したり、作品にならなかったとしてもプロジェクトとして関わっていくことを今は考えております。これで私の話は終わりたいと思います。

^{※1} VOC A賞: VOC AはThe Vision of Contemporary Artの頭文字をとったもの。VOC A展は若い現代美術作家の登竜門となっている。過去の出展者に奈良美智、村上隆等がいる。VOC A賞はグランプリ。
^{※2} この5つの昔話は、「新しい昔話 つなぎまち」と130人のこどもたち」として、絵本になっています(虚屯出版)。

(正村タカシ)